

た な ば た

七夕

はじめに

七夕は7月7日で子供たちがサトイモの葉についた露を集めたもので墨をすり、短冊に願いごとを書いてササにつけて飾る。福田では8日に引地川に七夕飾りを流した。この日に3粒でも雨が降るとオカボがよく取れるといった。農作業の多忙な時期を避けて、8月7日に行うところもあった。

(大和市編『大和市史 8(下) 別編 民俗』大和市、1996)

けんぎゅう しよくじょ

七夕といえば、牽牛・織女の恋物語や、短冊に願いごとを書いて吊るす笹飾りがおなじみですが、このような七夕の風習はどのようにして広まったのでしょうか。今回は「七夕飾り展示」にちなんで、七夕の笹飾りが成立するまでの歴史を概観してみたいと思います。

1. 中国の乞巧行事

6世紀中ごろの中国の長江中流域の年中行事や風俗を記した『荊楚歳時記』には、7月7日の夜は牽牛・織女が出会う時で、家々では「乞巧」といって女性たちが庭の台に酒食や瓜を供えて、色糸を針孔に通して裁縫の上達を祈願すると記されています。

中国の乞巧の行事は後に日本に伝わりました。奈良の正倉院には銀や銅、鉄製の7本の針と白・黄・赤の3色の絹糸の束が遺されています。このうち鉄の大針の孔には赤糸が通されており、奈良時代には『荊楚歳時記』のような乞巧行事が日本の宮廷でも行われていたことがうかがえます。また、『万葉集』には七夕歌132首も収められており、そのほとんどが牽牛・織女の恋物語を詠んだものです。

2. 宮廷儀礼の乞巧奠

日本に伝わった乞巧行事は、平安時代には「乞巧奠^{きつこうでん}」として宮廷儀礼となりました。平安時代後期の宮廷儀礼を記した『江家次第^{ごうけしだい}』には、清涼殿の東庭に高机を据えて、その上に瓜などの季節の作物や酒、五色の糸をより合わせて金銀各7本の針に通して楸の葉^{ひさぎ}に刺した^{こと}もの、箏^{さくもん}などを供え、作文の遊びなどを行ったことが記されています。

3. 梶の葉

鎌倉時代成立とされる『平家物語』巻第1「祇王^{ぎおう}」に、七夕の空を眺めながら梶の葉^{かじ}に願いごとを書く風習が見えます。室町幕府の年中行事を記した『年中恒例記』には、7月7日に七夕歌を7首詠み、これを芋の葉の露ですった墨で梶の葉に書き、竹に付けて高く掲げたことが記されています。

4. 笹飾り

延宝4年（1676）の序をもつ『日次紀事^{ひなみ きじ}』には、京都では七夕に武家・庶民ともそうめんを食べ、互いに贈答し、夜に歌会を行い、短冊や楸、梶の葉に詩歌を書き、そうめん、茄子、瓜とともに牽牛・織女に供えたことが記されています。文化年間（1804～1818）に全国各地の風俗習慣を調査した「諸国風俗問状^{しょこくふうぞくといじょう}」の答えによれば、現在の秋田県や福島県では笹飾りはまれでしたが、西日本では広く行われていました。例えば阿波国（徳島県）では短冊に詩歌や発句を書いて小竹に付けていました。興味深いのは、寺子屋で行うという事例が複数見られることで、笹飾りの風習は寺子屋や手習いの師匠を通じて各地へ広まり、その後全国化したと考えられます。